

エコたま グリーン NEWS



多摩市民環境会議機関紙 第138号(通巻第198号)
2014年11月20日発行 発行人:清水武志郎 編集人:井上ひさかず 〒206-0025 多摩市永山3-9 東永山複合施設301 (事務局員は常駐していません)
e-mail qqh43tdd@train.ocn.ne.jp
URL www.ecomeetingtama.jp

第4回環境学習セミナー

再生可能エネルギーを市民の手で



林久美子・多摩エネ協理事の講座
所の取り組み」だった。

第4回目を迎えた今期の環境学習セミナーは、11月9日午前、多摩市役所第二庁舎の会議室で開催された。受講者は19人。テーマは「市内、自然エネルギー対応の事業

セミナーのパートは2部に分かれ、最初が当会議の井上寿一副代表が報告する「セブンイレブン豊ヶ丘4丁目店の最新環境性能」、2番目が多摩循環型エネルギー協会の林久美子理事が「再生可能エネルギーを市民の手で」と題する講演を行った。ここでは、2番目の講演のほうから先に内容をまとめてお伝えしたい。

やはり活動の引き金は「東日本大震災(2011. 3. 11)」だった。それ以前の市民活動の反省として、アピール・署名・カンパ・デモなど意思表示のみの片側通行型だったが、震災後にはより具体的に形あるもの、仕組みなどを子や孫に残したり、共有するビジョンをつくろうとの思考に変わり、「エネルギーの地産地消を図る、市民発電所をつくろう!」との結論に至った。



第1号発電所の屋上に資材搬入

署名・カンパ・デモなど意思表示のみの片側通行型だったが、震災後にはより具体的に形あるもの、仕組みなどを子や孫に残したり、共有するビジョンをつくろうとの思考に変わり、「エネルギーの地産地消を図る、市民発電所をつくろう!」との結論に至った。

大企業とこうした市民活動から生まれた発電所を比較すると、大企業には豊富な資金力、高い技術力、経営総合力などがあるが、市民団体にはそれがない代わりに高い理念、賛同する多くの市民、地域の人材ネットワーク、社会貢献・地域貢献などの資産がある。

こうした市民力の強みで大企業に伍していくしかない。自分たちの知恵と汗とスクラムで壁を突破しようと考えた。

地域で市民、行政、企業、団体がつながり、循環型エネルギー社会づくりに貢献。多摩市から多摩ニュータウン地域へ、そして多摩全域に思いの輪を広げる。たんなる市民運動ではなく、自立したソーシャルビジネスとして世代を超えて継承し、日本の未来をつくるこ



となどを夢や目標に掲げている。

同協会が着目したのは、多摩ニュータウンの集合住宅の屋根だ。多摩市、八王子市、稲城市、町田市の4市のニュータウン 次世代リーダー育成企画の発表地域全体の公共施設、集合住宅の屋根など全体に太陽光発電施設が載せられたら、約102メガワット(37,000世帯分)の潜在性がある。



仮にニュータウンの団地すべての屋根に載せられたら、ニュータウンの家庭(約8万世帯)の40%に電気を送ることができるとの試算結果になった。そうすればエネルギーの一方的な消費地だった当地をエネルギーの生産地に変える一歩になるのではないかと。

そして私募債で募った資金で2013年3月18日に恵泉女学園大学南野校舎屋上に、出力30kWの発電所の工事が始まり、同年6月に発電を開始して予定どおり東京電力に売電中。その後、ゆいま〜る聖ヶ丘の第2号発電所が竣工。最近が多摩市と協定を結び、市の9公共施設の屋根借りが実現し、400kW超の発電施設を確保した。

多摩エネ協の発電以外の活動では、「次世代リーダー育成プログラム」というものがある。この目的は、再生エネ・環境などの分野で「行動する人材」を育成すること。具体的には月1回の大学生、大学院生向けのプログラム。学生主体の地域アクションを通じた体験学習を行い、その報告会も開催する。現在、多摩地域中心に8大学の17名の学生が所属してプログラムを進行中。この企画には社会人の先達者(メンター)が学生をサポートする。

こんな次世代を見据えた活動も行いながら、再生可能エネルギーの地域循環を推進することにより、持続的に地域に利益を生み出す仕組みを育てることが、長期的な多摩エネ協(事業会社は多摩電力合同会社)の役割だと考えている。

セブンイレブン豊ヶ丘4丁目店の最新環境性能

2009年8月31日に開店したセブンイレブン豊ヶ丘4丁目店は、約1万7000店あるセブンイレブンのなかでも最新環境性能を備えている全国的にもエリート店だ。



中央が太陽電池、右が自然光

太陽(自然)光を店内に取り入れ、照明類は店内や看板、サインポールも含めてほとんどすべてがLED(発光ダイオード)による。日中にその自然光が強くなると、自動的にLED照明が消灯する仕組みも。外部との仕切りのガラスは遮熱ガラスを使用し、空調の負荷を軽減する。壁材や屋根材なども再利用可能な資材を採用している。

店内の弁当ケース、チルド(冷凍)ケースなども照明はLED化で省電力に、チルドでは風防を設置して庫内冷気の効率化を図っている。むろん床のタイルや空調などにも工夫をこらし、省電力化を進めている。

この結果、こういった環境配慮型店は2014年8月末現在821店、太陽光パネル設置店数が6612店となり、消費電力の既存店比はなんと約30%の削減に成功している。こういう店が市内にあることをぜひ知っておいてほしい。

一ノ宮用水で和やかに再度の生物調査



9月に生物調査を行い、護岸の工事後にほぼ工事前の自然が戻っていることが確認された市内一ノ宮1丁目の一ノ宮用水で、11月16日にも追加の調査が行われた。

採取された生物の種類と体長を記録 これは新しく設けられた橋（コンクリート板）の下が魚類の避難所とか越冬の場になるため、そのへんを実際の調査で確かめてみようというのが主旨だが、実際の調査はこれまでと同じ3カ所の調査場所と、橋の下の4カ所で行われた。

西田一也東京農工大学非常勤講師が指揮をとり、調査の参加者は市の環境政策課、児童館、パルテノン多摩、大栗川を楽しむ会、当会議など輪が広がって14人（うち女性4人）。本紙や農業支援サイトの「AGRIAGRI」の2メディアが取材するなど、活動も本格的になってきた。



たくまくん（手前）も一緒に活動 今回はとくに、東寺方小学校の4年生で魚好きのたくまくんや大学生の田村くんも参加。和やかな雰囲気の中かで調査が行われた。

調査は早めに始めないと日没になってしまうから、と午後1時過ぎから開始。1カ所は20m区間を3人の採捕者がガサガサを行いながら生物を捕獲し、まずバケツに入れ、それを西田さんが個体の長さなどを記録しながらつぎの場所へと継続して進める。

今回も前回のようにギンブナやドジョウが多い。とくに問題の橋の下では46センチもの大きさのコイが捕獲され、みんなビックリ。たくまくんが「これはこの川の主だな」とひとこと。

採捕された生物は、ギンブナ69、ドジョウ33、オイカワ19、タモロコ13、カワムツ11、コイ1、ヌマエビ類1570、アメリカザリガニ57、カワニナ類7、シオカラトンボヤゴ30など、非常に大きな“戦果”があった。

この調査結果は、また西田講師によって報告書にまとめられるが、とくに多摩地区の他の用水よりギンブナが



多いのが特徴という。また、改修に合わせて設けられた橋の下の深みが確かに生物の「ゆりかご」となっている点などが明らかになっているようだ。

なお、AGRIのホームページは <http://www.seeds-tama.com/agriagri/>

まち美化キャンペーン 11月の清掃デーに合わせ

平成17年度の「喫煙マナーアップキャンペーン」から継続して続いている市民の清掃活動は、平成21年度より「多摩市まち美化キャンペーン」と名称を変え、今年も2回目の活動が11月11日から13日の3日間、「市民清

掃デー」に合わせるようにして開催された。時間はいずれも午後3時30分～4時30分の1時間。

今回から清掃地域や人 聖蹟桜ヶ丘駅で活動後の記念撮影 通りの比較的少ない唐木田駅周辺が除かれ、キャンペーン場所は多摩センター駅周辺（11日）、永山駅周辺（12日）、聖蹟桜ヶ丘駅周辺（13日）と3会場になった。

しかも、初日の多摩センターでは駅周辺組と乞田川の山王橋から上之根橋までの川のなかと側道も、初めて清掃の対象になる。具体的には乞田川のなかは当会議の2名が行い、側道は多摩市中学校PTA協議会のみなさんが担当してくれた。

多摩センター駅では、京王電鉄の電車型マスコット・ケータくんとJ2東京ヴェルディのマスコット・ヴェルディくんがデュオでキャンペーンにひと役買い、駅の構内を歩く通行者に盛んにアピールしていた。ケータくんなどは、ほうきを持って掃き掃除までしてくれ人気者となり、ヴェルディくんも記念写真の相手に引っ張りだこ。

なお、3日間のキャンペーン参加者は、多摩センターが市民64名、市職員6名の計70名、永山駅が市民38名、市4名の計42名、聖蹟桜ヶ丘駅が市民41名、市5名の計46名で合計158名だった。5月のごみゼロデーに合わせたキャンペーンとの合計では、それぞれ311名と38名で総参加人数は349名に上った。



ケータくんとヴェルディくん

緑陰のすすめ——優しい気候変動適応策——(続)

紫外線による生物への影響としては、急性のものとして日焼け、雪目、免疫機能低下などがあり、慢性のものとしては皮膚ではシワ、シミ、良性腫瘍、前がん症、皮膚がん、目では白内障、翼状片などがある。緑陰はこれらの有害紫外線を遮る効果が大きい。

では、直接日射を浴びる樹木や植物は日焼けしないのかというと、じつは日焼けする。ただ、体の構造や生理活性により、日焼けを最小限にとどめる特性がある。植物は自らが日陰に入ることにはできないから、紫外線に対する防護機能があるのだ。

単木（一本の木）では、周囲から回り込む散乱紫外線の暴露を受けるので、なるべく大きな緑陰・木陰に入るようにしましょう。温熱環境緩和機能や日射（紫外線）を遮蔽する作用は普遍性がある。

先端的科学分野でもハイテクでもないが、森林という希薄分散資源をもっと活用したいし、また身近な活用法、多面的機能を発揮し、人間にダイレクトに効いてくる資源、社会インフラとしての利用法があるかもしれない。

いまある緑資源を健康維持にも低炭素な社会づくりにも活用したいとの願いを込めて、緑陰・木陰の活用は温熱環境の検証に移ってきた。シナジー効果のある緑陰・木陰の活用が微力でも低炭素な社会づくりの一助になれば、グリーン・イノベーションの一端も担えると楽観的に考えている。（森林総合研究所・岡野通明氏の講演から）